

幼児期におけるカテゴリー知識と記憶の体制化

山田 紀代美

(お茶の水女子大学 人間文化研究科)

複数の項目を効率よく記憶しようとする際、カテゴリーごとに項目を分類し、まとめて覚える体制化方略を利用することがある。この体制化の分類次元について、主題的關係から概念的關係に基づく分類へと発達の移行がみられるとする見解(e.g. Bjorklund & Marchena, 1984)があるが、一方で、幼児期初期においても概念的關係に基づく体制化がその知識構造の一部をなしていることを示唆する結果(e.g. Blewitt, 1991)も報告されており、上記のような主題-概念間の移行があるのかどうかは疑問視される。そこで、本研究では幼児の記憶の体制化において各次元に基づく分類がどの程度みられるのか、年齢や教示内容(課題要求)の違いによって着目する次元の質的变化、移行があるのかを検討する。また、複数の次元に柔軟に着目することがどの程度可能であるかという面での発達の变化を調べる。加えて、幼児が記憶を促進するための手段として体制化方略を意図的に使用することが可能であるかどうかを検討する。

【方法】

実験計画；2年齢×3条件(分類・分類記憶・記憶)の2要因計画、

被験児；4歳児(M=4:8)、5歳児(M=5:8)。各条件20名ずつ。

材料；主題的關係、概念的關係のいずれの次元でも分類可能な12項目(FIG. 1)の絵カード。

手続き；個別実験事態で、材料提示後、各条件ごとに分類群には単に絵カードを分類するよう(分類課題)、分類記憶群には記憶するために分類するよう(分類記憶課題)、記憶群には単に記憶するよう(記憶課題)、それぞれ教示を与えた。その後、全条件で自由再生テストを実施。さらに分類群・分類記憶群には次元シフト課題を行い、前の課題で着目した次元とは別の次元に着目しなおして分類することが可能であるかを調べた。

【結果と考察】

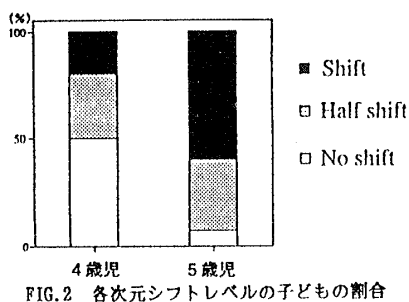
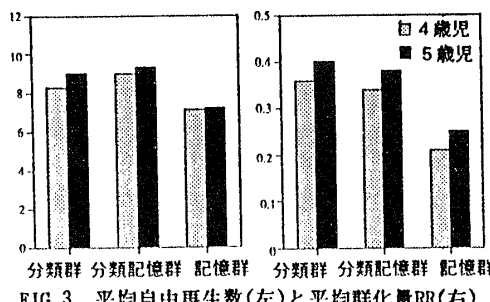
(1)分類次元について；各次元で分類された項目数(TABLE 1)に



FIG. 1 実験で使用した記憶項目のセット

TABLE 1 各次元で分類された項目数(%)

	主題的關係	概念的關係
4歳児 分類群	106(44%)	98(41%)
分類記憶群	134(56%)	86(34%)
5歳児 分類群	80(37%)	102(47%)
分類記憶群	88(41%)	116(56%)



ついて差の値(概念-主題)をとり、2要因分散分析を行った結果、年齢や条件(教示内容)による有意な差はみられず、両次元での分類は同程度にみられた。(2)次元シフトについて；自発的にシフト可能(Shift) 例示後に可能or一部項目のみ可能(Half shift)、シフト不可能(No shift)な子どもの分布(FIG. 2)には年齢によって有意な差がみられた($\chi^2(2)=20.6, p<.01$)。4歳児では別の次元に着目しなおすことは困難だが、5歳児になると半数以上の子どもで自発的な次元シフトが可能になる。(3)自由再生について；平均再生数と群化量(FIG. 3)について年齢×条件の分散分析の結果、ともに条件の主効果のみ有意であり、分類記憶群≧分類群>記憶群の間に有意な差がみられた($p<.01$)。分類群と分類記憶群との間に差がなかったことから、実験者に教示されて行った分類行為そのものが記憶を促進しており、記憶のための手段として分類を利用しえないことが示唆される。

【補足調査】

大学生10名を被験者に、上記の実験と同様の課題を行った。その結果、大学生では両方の分類次元を利用し、主題的關係を下位、概念的關係を上位とする階層的な構造化(体制化)をおこなって記憶しようとしていた者が多かった。

【総括的討論】

本研究の結果からは、4-5歳児において主題的關係から概念的關係への発達の移行はないことが示唆された。むしろ、一方の次元に着目は可能だが別の次元への着目が困難である段階から、両方の次元に同時に柔軟に着目することが可能になっていくという側面で発達に伴う質的な変化がみられた。さらに、補足調査の結果を踏まえて考察すると加齢に伴う知識の増大とともに、より有効な1つの次元のみに選択的に着目し整合的に体制化することや、複数の次元を階層的に構造化することが可能になっていくと推察される。また、幼児期の段階では体制化方略(分類)を記憶のための意図的な方略として利用しえないことが示された。知識ベースの発達に伴い、分類という行為が自動化されていくにつれ、体制化方略が記憶のために有効かつ特別な手段として機能するようになっていくと考えられる。